

病害虫発生予察情報(12月予報)

令和7年11月27日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (12月の県平均平年値)	予報の根拠
温州みかん	青かび・緑かび病	発生量：並	11月上旬発生量：樹上：少（－） ：落果：やや多（＋） 気象予報：気温：ほぼ平年並（±） 降水量：少ない（－）
	ミカンハダニ	発生量：地域により差がある 東部：やや少 中部：並 西部：多	11月上旬発生量：地域により差がある 東部：少（－） 中部：やや少（－） 西部：多（＋） 気象予報：気温：ほぼ平年並（±） 降水量：少（＋）
トマト	葉かび病・ すすかび病	発生量：やや少 (発病株率12.1%)	11月中旬発生量：少（－） 気象予報：気温：ほぼ平年並（±） 降水量：少ない（－）
	灰色かび病	発生量：やや少 (発病株率2.8%)	11月中旬発生量：少(発生なし)（－） 気象予報：気温：ほぼ平年並（±） 降水量：少ない（－）
	黄化葉巻病	発生量：やや少 (発病株率2.5%)	11月中旬発生量：少(発生なし)（－） コナジラミ類発生量：やや少（－） 防除員からの報告：やや多（＋） 気象予報：気温：ほぼ平年並（±）
	コナジラミ類	発生量：やや少 (寄生株率13.2%)	11月中旬発生量：やや少（－） 気象予報：気温：ほぼ平年並（±）
だいこん	黒斑細菌病	発生量：少 (発病株率3.5%)	11月下旬発生量：少(発生なし)（－） 気象予報：気温：ほぼ平年並（±） 降水量：少ない（－）
	白さび病	発生量：少 (発病株率2.5%)	11月下旬発生量：少(発生なし)（－） 気象予報：気温：ほぼ平年並（±） 降水量：少ない（－）
	モザイク病 (アブラムシ類)	モザイク病発生量：少 (発病株率1.7%) アブラムシ類発生量：多 (寄生株率6.3%)	11月下旬発生量 モザイク病：少(発生なし)（－） アブラムシ類：多（＋） 気象予報：気温：ほぼ平年並（±） 降水量：少ない（＋）
	コナガ	発生量：少 (寄生株率0.8%)	11月下旬発生量：少(発生なし)（－） フェロモントラップ誘殺数：多（＋） 気象予報：気温：ほぼ平年並（±） 降水量：少ない（＋）
	ナモグリバエ	発生量：少 (寄生株率：5.7%)	11月下旬発生量：少（－） 気象予報：気温：ほぼ平年並（±） 降水量：少ない（＋）

作物名	病害虫名	予報 (12月の県平均平年値)	予報の根拠
キャベツ	黒腐病	発生量：少 (発病株率1.3%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：少ない(-)
	菌核病	発生量：少 (発病株率0.4%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：少ない(-)
	コナガ	発生量：少 (寄生株率0.2%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：少ない(+)
	オオタバコガ	発生量：少 (寄生株率0.04%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：少ない(+)
	タマナギンウワバ	発生量：少 (寄生株率0.4%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：少ない(+)
	アブラムシ類	発生量：少 (寄生株率0.7%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：少ない(+)
たまねぎ	腐敗病	発生量：少 (発病株率0.7%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：少ない(-)
	ネギアザミウマ	発生量：やや多 (寄生株率25.7%)	11月中旬発生量：やや多(+) 被害度：低い(-) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：少ない(+)
ねぎ (白ねぎ)	さび病	発生量：少 (発病株率0.9%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：少ない(-)
	黒斑病・葉枯病	発生量：少 (発病株率1.9%)	11月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：少ない(-)
	ネギアザミウマ	発生量：多 (寄生株率8.8%)	11月中旬発生量：多(+) 被害度：高(+) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：少ない(+)
	ネギハモグリバエ	発生量：少 (寄生株率1.8%)	11月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：少ない(+)
レタス (非結球 レタス を除く)	斑点細菌病	発生量：少 (発病株率0.7%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：少ない(-)
	べと病	発生量：少 (発病株率0.9%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±) 降水量：少ない(-)

作物名	病害虫名	予報 (12月の県平均平年値)	予報の根拠
いちご	うどんこ病	発生量：地域により差がある 東部：少 中部：少 西部：多 (発病株率 1.1%)	11月上中旬発生量：地域により差がある 東部：少(発生なし)(-) 中部：少(発生なし)(-) 中遠：多(+) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±)
	炭疽病	発生量：少 (発病株率 1.3%)	11月上中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±)
	アザミウマ類	発生量：多 (寄生株率 2.7%)	11月上中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±)
	アブラムシ類	発生量：並 ただし、中遠：多 (寄生株率 2.8%)	11月上中旬発生量：並(±) ただし、中遠：多(+) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±)
	ハダニ類	発生量：やや少 ただし、中遠：やや多 (寄生株率 18.1%)	11月上中旬発生量：やや少(-) ただし、中遠：やや多(+) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±)
	ハスモンヨトウ	発生量：少 (寄生株率 0.1%)	11月上中旬発生量：少(-) フェロモントラップ誘殺数：少～多(-～+) 気象予報：気温：ほぼ平年並(±)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県過去の10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県過去の10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1か月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

静岡県病害虫防除所 HP



静岡県病害虫防除所 HP

<https://www.pref.shizuoka.jp/sangyo/shigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>

2 予報の根拠と防除対策

【温州みかん】

<生育の概況>

県果樹研究センター及び県伊豆農業研究センターによると、青島温州における果実肥大は平年並～良いものの、着色は平年よりやや遅い～遅い。

●青かび・緑かび病

予報の根拠

- ・11月上旬の巡回調査では、平均樹上発病果数は0.5個/樹（平年1.0個/樹）と平年より少なかった。落果発病率は6.1%（平年5.5%）と平年よりやや多かった。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並で、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・発病果を放置すると園地内の菌密度を高める。見回りを行い、発病果を発見したら速やかに園地外に持ち出して処分する。
- ・防除を行う場合は、収穫前日数に注意して薬剤の選択をする。
- ・収穫、運搬、選果の際に果皮が傷付くと感染を助長し貯蔵中の発病が増加するため、丁寧な作業を心がける。
- ・果実が過熟にならないよう適期に収穫し、雨の日や雨の翌日など果実に水滴が残っているようなときには収穫を避ける。
- ・収穫後は入庫時の予措を徹底するとともに、貯蔵中は点検を行い発病果の除去をする。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・11月上旬の巡回調査では、県全体の平均寄生葉率は4.3%（平年2.2%）と平年より多かった。
- ・ただし、地域別では、東部で寄生は認められず（平年0.4%）、中部で1.7%（平年2.4%）と平年よりやや少なく、西部で11.1%（平年3.5%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並だが、降水量は平年より少ないため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・発生が多い園地では、収穫前日数に注意して薬剤防除を行う。
- ・剪定後、越冬虫を対象にマシン油乳剤を散布する。ただし、寒害を受けやすい園地では3月に散布する。

【かんきつ全般】

<その他の病害虫>

●黒点病

- ・近年、本県では多発傾向にある。
- ・樹冠内部の枯枝や園地の内外に放置された剪定枝、切株などで本病の胞子が作られ伝染源となる。
- ・枯枝の除去、整枝、剪定を適正に行う。樹冠内部の採光、通風を良好な状態に保ち、耕種的防除を適切に実施する。
- ・剪定枝は処分し、園地内や周囲に伝染源を放置しない。

●かいよう病

- ・近年、本県では多発傾向にある。
- ・本病の越冬病斑は重要な伝染源となるため、園地からの除去を徹底する。発生園地では冬期に発病枝葉の切除、防風垣・防風ネットの整備を徹底し、翌春の新梢への感染拡大を防ぐ。

●ハナアザミウマ類

- ・10月上中旬の巡回調査では、平均寄生果率は1.0%（平年0.1%）と平年より多く、一部ほ場では着色果への多寄生も認められた。
- ・11月上旬の巡回調査では、複数の園地（発生面積率33.3%）で本虫の果実への寄生が確認された。
- ・着色期以降に飛来して果実を加害する。加害部は白くかすれた後、褐変し、腐敗する場合もある。
- ・本虫はセイタカアワダチソウなどの開花した雑草で増殖し、園地へと飛来する。園地周辺にこうした雑草が多い場合には、本虫の飛来に特に注意する。
- ・黄色粘着板により園地への飛来を早期に把握する。また、園地内でも着色の早い樹が被害を受けやすいため、こうした樹を重点的に観察し、早期発見に努める。
- ・気温の低下とともに園地への飛来は減少するが、着色果への多寄生を認めた場合、収穫前日数に注意して薬剤防除を行う。

●カイガラムシ類（マルカイガラムシ類、ヤノネカイガラムシ、イセリヤカイガラムシ、ロウムシ類、コナカイガラムシ類）

- ・近年の温州みかん巡回調査では、各種カイガラムシの発生が平年より多い状況が続いている。
- ・剪定によりカイガラムシ類の寄生枝を除去するとともに、散布薬剤が届きやすい樹体に仕立てる。
- ・発生園では、越冬成虫に対する冬季のマシン油乳剤散布を徹底し、初期密度を下げる。
- ・防除対策については「令和7年度技術情報第4号（かんきつ カイガラムシ類）」も参照する。

【トマト】

<生育の概況>

生育はやや遅い～平年並傾向。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は1.7%（平年10.3%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しないが、例年12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病26～28℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・葉かび病については、葉かび病抵抗性品種（Cf-9）を侵すレース2.9の発生が県内で確認されている。本県では12月以降は葉かび病の発生が増加する傾向があるため、葉かび病抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、葉かび病の発生に注意する。
- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、作用性の異なる薬剤をローテーション散布する。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。

- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に撤去し、適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、本病の発生は認められなかった（平年発病株率0.9%）。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しないが、例年、12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・株の繁茂、ハウス内湿度の上昇、株の結露により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、作用性の異なる薬剤をローテーション散布する。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ほ場外に撤去し、適切に処分する。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。

●黄化葉巻病

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、本病の発生は認められなかった（平年発病株率1.4%）。
- ・媒介虫であるタバココナジラミの平均寄生株率は11.0%（平年13.3%）と平年よりやや少なかった。
- ・病害虫防除員からは、4名中2名から本病の発生が「やや多い」との報告があった。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並であり、本病を媒介するタバココナジラミの増殖を特には助長しないため、本病の発生は特には助長されない。

防除対策

- ・本病はタバココナジラミによって媒介されるため、タバココナジラミの防除を徹底する。防除対策については、コナジラミ類の項を参照すること。
- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・多発ほ場においては、耐病性品種の利用を検討する。なお、耐病性品種でも感染し、ウイルス密度が高まると発病するため、タバココナジラミの防除を徹底すること。

●コナジラミ類

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は11.0%（平年13.3%）と平年よりやや少なかった。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
- ・葉裏における成幼虫の寄生状況を観察するとともに、黄色粘着板における誘殺数に注意し、発生が確認さ

れた場合は薬剤防除を実施する。

【だいこん】

＜生育の概況＞

生育は平年並。

●黒斑細菌病

予報の根拠

- ・11月下旬の巡回調査では、本病の発生は認められなかった（平年発病株率0.4%）。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない（本病の発病適温は25～30℃、降雨は本病の発生を助長する）。

防除対策

- ・生育の衰えは本病の発生を助長するため、肥料切れと排水に注意し、適切な管理に努める。
- ・病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨の前か直後に防除を行う。
- ・降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・特に、葉柄基部から侵入した場合は根部に影響を与え、商品価値を落とすこともあるため注意する。

●白さび病

予報の根拠

- ・11月下旬の巡回調査では、本病の発生は認められなかった（平年発病株率0.1%）。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない（本病は多湿を好み、分生子の発芽最適温度は10℃程度である）。

防除対策

- ・白さび病が多発するとワッカ症を併発することがあるため、は種時期の遅い作型では、葉での発病が少ないうちに予防散布を行うことが必要である（予防散布の防除適期は間引き後7～30日）。
- ・発病残渣は翌年の伝染源となるため、ほ場外に撤去し、適切に処分する。
- ・排水を良好にするなどして多湿にならないように努める。

●モザイク病（アブラムシ類）

予報の根拠

- ・11月下旬の巡回調査では、モザイク病の発生は認められなかった（平年発病株率0.4%）。
- ・本病の媒介虫であるアブラムシ類の平均寄生株率は1.4%（平年0.5%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、降水量は少ないが、気温はほぼ平年並のため、アブラムシ類の発生をあまり助長しない。このため、本病の発生もあまり助長されない。

防除対策

- ・雨が降らない日が続くとアブラムシ類が急増する場合があるので、ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。
- ・発病株も伝染源となるため、速やかに抜き取り、ほ場外で適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠

- ・11月下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率0.1%）。

- ・フェロモントラップによる本種の誘殺状況は、浜松市で平年より多く推移している。
- ・1か月予報では、降水量は平年より少ないが、気温はほぼ平年並のため、本種の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。

●ナモグリバエ

予報の根拠

- ・11月下旬の巡回調査では、平均寄生株率0.2%（平年2.2%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より少ないが、気温はほぼ平年並のため、本種の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・葉表の白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕が多数見られる場合は、薬剤防除を実施する。

【キャベツ】

<生育の概況>

生育は平年並である。

●黒腐病

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率0.9%）。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並だが、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・本病は、例年12月まで発生が見られるため、暴風雨の前後に薬剤散布を行い、予防や感染の拡大防止に努める。
- ・被害残さは感染源となるため、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。

●菌核病

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率0.2%）。
- ・本病は気温20℃前後で雨の多い年に発生が多い。1か月予報では、気温はほぼ平年並だが、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・本病は例年12月まで発生が見られるため、薬剤の予防散布や被害の拡大防止に努める。
- ・被害残さは感染源となるため、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率0.1%）。
- ・1か月予報では、降水量は平年より少ないが、気温はほぼ平年並のため、本種の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・発生を確認したら早めに防除を行う。幼虫は葉裏に生息するので、薬剤が葉裏にかかるように散布する。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率0.2%）。
- ・1か月予報では、降水量は平年より少ないが、気温はほぼ平年並のため、本種の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・結球内部に入ってしまうと薬剤が届かないため、発生が見られたら早めに防除を行う。

●タマネギンウワバ

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率0.7%）。
- ・1か月予報では、降水量は平年より少ないが、気温はほぼ平年並のため、本種の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・幼虫の発育が進むと食害量が多くなるため、発生が見られたら早めに防除を行う。幼虫は葉裏を加害するため、防除の際は葉裏にも薬液が十分かかるように散布する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率0.7%）。
- ・1か月予報では、降水量は平年より少ないが、気温はほぼ平年並のため、本種の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・本種は風通しの悪い場所に多く発生することから、例年発生が認められるほ場では発生に注意し、早めに防除を行う。

【たまねぎ】

<生育の概況>

生育は、平年並である。

●腐敗病

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率1.9%）。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並だが、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・本病は細菌病であり、暴風雨等による傷口から侵入するため、暴風雨の前後に薬剤散布を行い、予防や感染の拡大防止に努める。
- ・ネギアザミウマの食害も本病の感染を助長するため、発生に注意し、本種の防除を実施する。
- ・発病株は感染源となるため、速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は21.2%（平年16.2%）と平年よりやや多かった。被害程度を示す被害度は5.4（平年8.4）と平年よりもやや低かった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より少ないが、気温はほぼ平年並のため、本種の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・12月に入り気温が下がると、本種の活動が抑制され被害が目立たなくなるが、暖冬の年は冬期も増殖して被害を及ぼす恐れがあるため発生に注意する。成幼虫が葉の付け根等に集合、寄生しているため、発生状況を確認して防除を行う。

【ねぎ（白ねぎ）】

<生育の概況>

生育は平年並～やや遅れている。

●さび病

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率0.5%）。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並だが、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない。ただし、例年12月は発生が増加するため注意する（本病の発病適温は10～22℃、降雨は本病の発生を助長する）。

防除対策

- ・肥料の過不足は発病を助長するので、施肥を適正に行う。
- ・薬剤防除は予防散布や発生初期の散布が効果的である。殺菌剤を連用する場合は、系統の異なる剤を選択し、散布する。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、平均発病株率1.4%（平年3.3%）と平年より少なかった。
- ・黒斑病の分生子発芽・形成適温は24～27℃で、降雨が多いと発生が増加する。また、葉枯病の多発気温は15～20℃である。1か月予報では、気温はほぼ平年並だが、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・肥料切れで草勢が低下すると発病しやすくなるので、適切に施肥を行う。
- ・薬剤散布は予防散布や発病初期の散布が効果的である。殺菌剤を連用する場合は、系統の異なる剤を選択し、散布する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は20.4%（平年10.2%）と平年より多かった。被害程度を示す被害度は37.0（平年13.2）と平年よりも高かった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より少ないが、気温はほぼ平年並のため、本種の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・12月に入り気温が下がると本種の活動が抑制され被害が目立たなくなるが、暖冬の年は冬期も増殖して被害を及ぼす恐れがあるため発生に注意する。成幼虫が葉の付け根等に集合、寄生しているため、発生状況を確認して防除を行う。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は13.6%（平年24.2%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より少ないが、気温はほぼ平年並のため、本種の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・今後は気温の低下に伴い発生は減少するが、発生が見られる場合は早めに防除する。
- ・本種は蛹が土壤中で越冬するため、多発生した場合は、次作の定植前に土壤消毒を実施すると防除効果が高い。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<生育の概況>

生育は平年よりやや遅い。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、本病の発生は認められなかった（平年発病株率0.1%）。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない（本病は比較的低温で多湿条件を好むため、トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなる）。

防除対策

- ・発病は主に結球期以降であるが、結球前に薬剤の予防散布をして葉面の病原細菌密度を下げる事が重要である。
- ・降雨が続くときや初発を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

●べと病

予報の根拠

- ・11月中旬の巡回調査では、本病の発生は認められなかった（平年発病株率0.2%）。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない（本病は生育適温10～15℃であり、多湿条件を好むため、トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなる）。

防除対策

- ・初発を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・罹病残さは、ほ場外に処分する。
- ・トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

<その他の病害虫>

●ビッグベイン病

- ・11月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率0.1%）。
- ・本病は土壤中に生息する菌によって媒介される土壤伝染性のウイルス病である。そのため、発病株の見られるほ場の土を、靴や農機具などにつけて他のほ場に持ち運ばないように注意する。

【いちご】

<生育の概況>

花芽の生育は平年よりやや遅い～遅い地域が多い。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 11月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は3.7%（平年0.7%）と平年より多かった。
- ・ 地域別の発病株率は、東部地域と中部地域では発生なし（平年0.7%、0.3%）、中遠地域では11.2%（平年1.2%）と、中遠地域で発生が多かった。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 胞子の発芽適温は20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため予防に努める。
- ・ 多発生すると防除が困難になるため、発病が少しでも見られた場合は早急に防除する。12月以降は果実への発生も多くなるため、発病果の早期発見と除去を徹底する。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 11月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.3%（平年1.6%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 本病の生育適温は28℃前後であり、高温・多湿条件下で発生しやすい。
- ・ 開花や着果で株に負担がかかると潜在感染株では萎凋症状が急速に進展する場合がある。
- ・ 発病株からその周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・ 発病株は培土も含めて抜き取りほ場外へ出す。放置残さは伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせるなど、適切に処理を行ってから処分する。
- ・ 本病原菌は水滴の飛散等によって伝染する。薬剤散布も伝染を助長する可能性があるため、散布前にほ場の見回りと発病株の抜き取りを徹底し、発病株への散布は行わない。
- ・ 薬剤感受性の低下が疑われる剤（MBC殺菌剤（FRAC:1）、QoI殺菌剤（FRAC:11））の散布は避け、薬剤耐性リスクの低い保護殺菌剤（FRAC:M1～11）を使用する。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・ 11月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は3.5%（平年2.3%）と平年より多かった。
- ・ 地域別では、東部で0.2%（平年0.2%）、中部で4.8%（平年4.7%）、中遠で5.4%（平年2.0%）と、特に中遠での発生が平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 本虫は花を好んで寄生する。花における発生状況をよく観察し、本虫の寄生が認められた場合は少発生うちに防除する。また、必要のない花は摘み取った後、ほ場外に持ち出し、ビニール袋で密閉するなどして適切に処分する。

- ・施設内外の雑草や花き類は、本虫の発生源となるため開花前に除去する。なお、開花後の雑草等の除去は、本虫の飛来を助長するため注意する。
- ・天敵製剤を利用する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・11月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は5.0%（平年4.7%）と平年並だった。
- ・ただし、地域別では、東部で1.6%（平年2.6%）、中部で8.2%（平年8.7%）、中遠で5.2%（平年2.7%）と、中遠での発生が平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・新葉等における寄生状況を観察し、初期防除に努める。
- ・天敵製剤を利用する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・11月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は11.5%（平年16.0%）と平年よりやや少なかった。
- ・ただし、地域別では、東部で6.4%（平年7.8%）、中部で1.2%（平年15.2%）、中遠で27.0%（平年22.2%）と、中遠での発生が平年よりやや多かった。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、天敵や気門封鎖剤を利用する。なお、気門封鎖剤は卵への効果が低く残効性が期待できないため、5日間隔程度で連続散布する。
- ・天敵製剤を利用する場合は、ハダニ類及び天敵の発生状況をよく観察する。ハダニ類の発生が多い場合には、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・11月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.1%（平年0.4%）と平年より少なかった。また、被害株率は3.7%（平年値なし、昨年8.9%）であった。
- ・フェロモントラップ調査における直近1か月の誘殺状況は、静岡市では平年より多く、磐田市及び御前崎市では平年より少なく推移している。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・気温の低下に伴い施設内への成虫の侵入は少なくなるが、発生を認めた場合は若齢幼虫のうちに防除する。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和7年11月20日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 11月22日から12月21日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月	天候	平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
	降水量	降水量は、少ない確率50%です。
	日照時間	日照時間は、多い確率60%です。
1週目	気温	1週目は、平年並の確率50%です。
2週目	気温	2週目は、平年並の確率50%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	30	30	40
1か月	降水量	50	40	10
1か月	日照時間	10	30	60
1週目	気温	20	50	30
2週目	気温	20	50	30
3～4週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

1か月 : 11月22日(土)～12月21日(日)
 1週目 : 11月22日(土)～11月28日(金)
 2週目 : 11月29日(土)～12月 5日(金)
 3～4週目 : 12月 6日(土)～12月19日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1

TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL <https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>